

令和 6 年度 シャープシューティング体制によるヤクシカの計画捕獲の実施

1. 実施目的

昨年度に引き続き、シャープシューティング（以下、SS）体制によるヤクシカの捕獲を実施する。

（H29～R1試験捕獲、R2～計画捕獲）

- ①屋久島での林道等においてSS体制による持続可能な実施体制を構築する。
- ②安全が確保され実行可能な実施スケジュールや規模で実施する。
- ③誘引状況に応じた捕獲実績を得る。

2. 実施期間

誘引作業 令和6年12月1日（日）～12月24日（火） ※捕獲の3週間前から実施

捕獲作業 12月21日（土）、24日（火）の2回実施

3. 実施場所

施業や工事等の計画及びカメラ調査の結果等を基に、関係機関と調整して島北西部の「カンカケ林道」を実施林道として選定した。

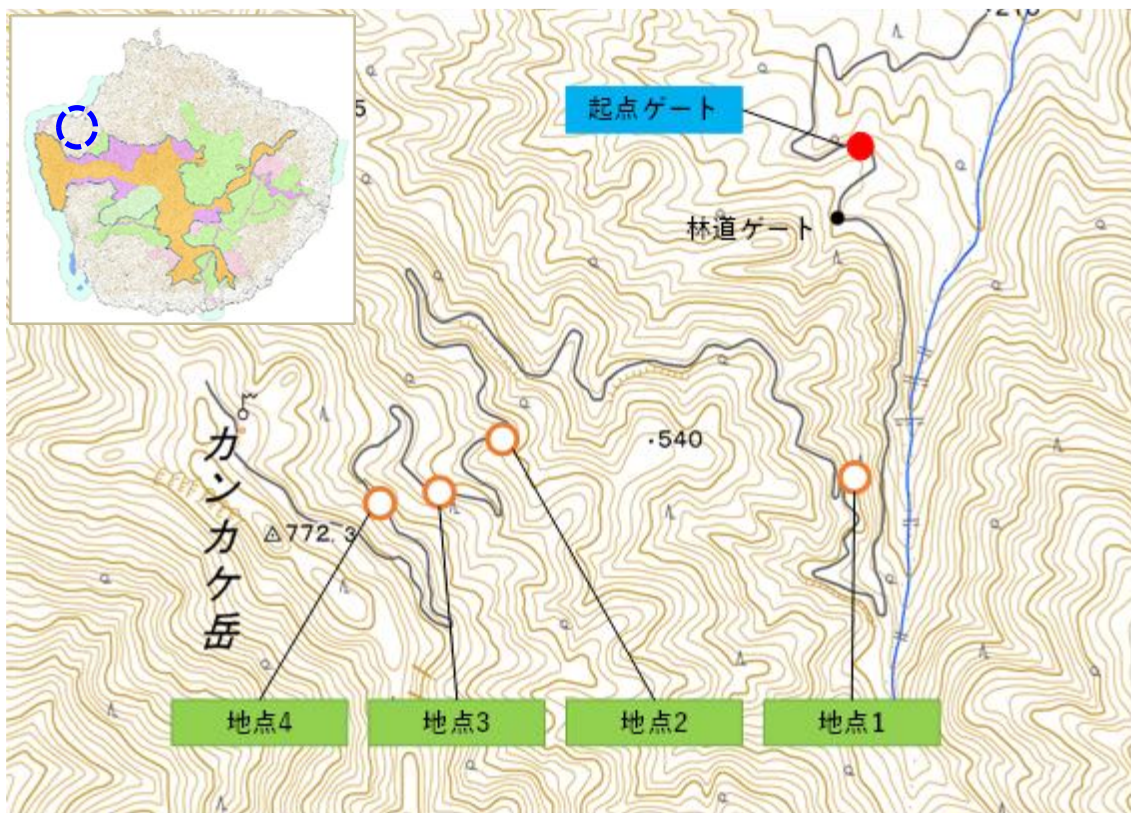


図 1 カンカケ林道における誘引地点位置図

4. 実施方法

誘引地点数や事前の調査から、昨年度湯泊林道で実施した「テント内で待ち伏せる誘引狙撃（待機型誘引狙撃）」を実施した。

また誘引地点から約 50m 離れた場所を待機地点とし、射手と観測手が待機できるテントを設置した。ヤクシカがテントに馴れるように、誘引開始前もしくは誘引開始1週間までにテントを設置した。

捕獲の際は林道ゲートを通行止めとして、他の車両が通行できないようにして安全性を確保した。

両日とも、4つの候補地点から、センサーカメラの撮影状況を考慮し捕獲地点として「誘引地点1・4」を選定し、それぞれの誘引地点に射手と観測手のチームをテント内に配置した。

射手と観測手は誘引車両に同乗して、誘引車両が餌を置くため捕獲地点に到着した後、車に隠れながらテントへ入り待機した。捕獲はテント内に3時間程度待機し、現れたシカの群れを射手がライフルを使用して捕獲した。

5. 捕獲の実施結果

2日間の捕獲の結果、オス1頭を捕獲した。

日付	実施林道	遭遇群れ数	射撃群れ数	捕獲頭数	発砲数	群れ全減数	群れ全減数 / 射撃群れ数 (全減率)	射撃群れ数 / 遭遇群れ数 (射撃率)	捕獲頭数 / 発砲数 (成功率)	備考
12/21	カンカケ林道	1	1	1	1	0	0%	100%	100%	捕獲：④オス1頭 1頭逃走
12/24	カンカケ林道	1	1	0	1	0	0%	100%	0	①1頭逃走
合計		2	2	1	2	0	0%	100%	50%	合計：オス1頭

表 1 捕獲結果



図 2 捕獲作業風景

6.誘引状況結果

誘引作業は12月1日から誘引餌を置き、翌日の餌の残存状況とセンサーカメラに撮影されたシカの出没状況を調査し、捕獲のための基礎情報とした。

誘引餌として、粉状〜イキュブ 500 g を使用し、補助的な餌として米ぬかを 100 g 程度合わせて使用した。誘引が不十分な時はイヌビワも使用した。誘引地点への地点的誘導の効果について餌の残存状況から、時間的誘導効果についてセンサーカメラによる撮影頻度から確認した。

○残存状況（地点的誘導の効果）

誘引地点に置いた餌の残存状況を1〜4の区分で記録した。餌の状況は原則的に毎日見回り、シカに食べられる等して減った分は追加した。また、雨や数日置いて状態が悪くなった場合は全量を取り換えた。

継続した誘引作業によって各誘引地点の餌は完食されるようになり、ヤクシカを餌により誘引することができた。捕獲を実施した翌日は餌を残すようになったが時間の経過とともに改めて誘引されるようになった。

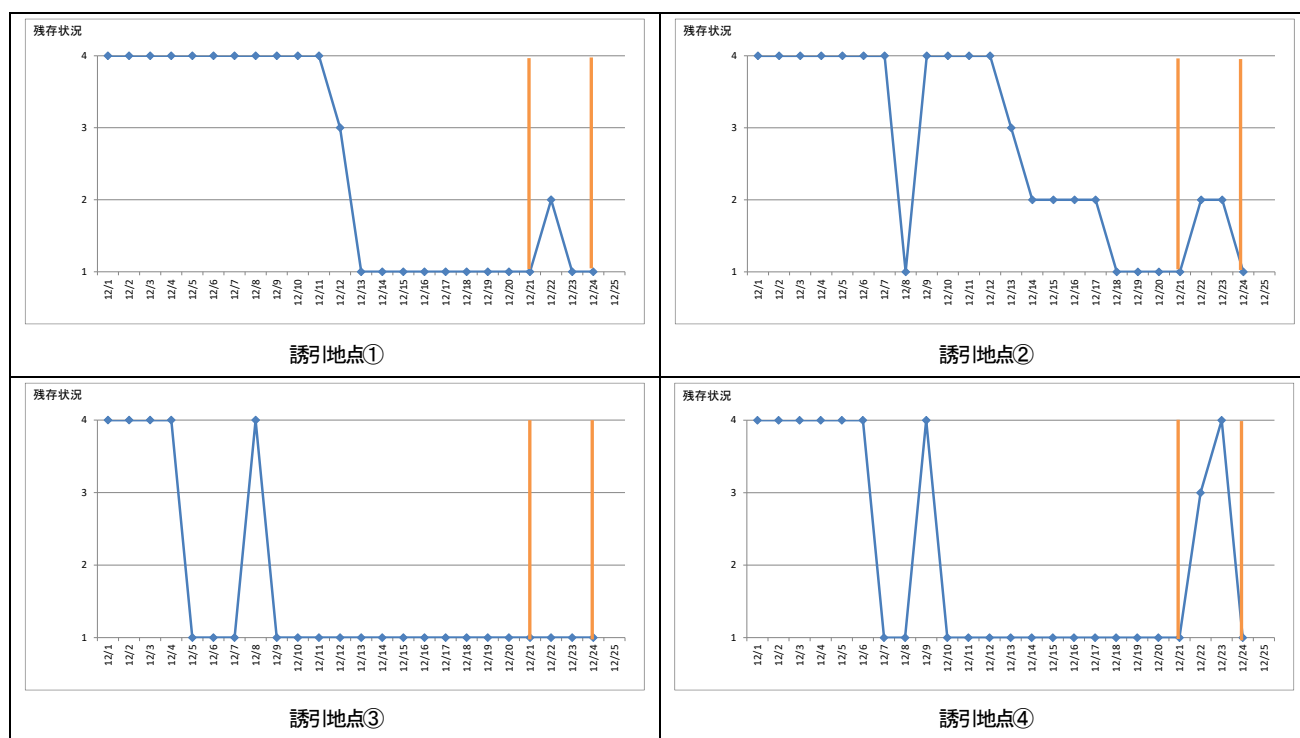


図3 誘引状況結果 カンカケ林道（捕獲実施日 —）

残存状況1：残存量0〜20%、2：残存量21〜50%、3：残存量51〜80%、4：残存量81〜100%

○センサーカメラによる誘引地点の撮影状況（時間的誘導の効果）

誘引開始後の出没状況は夜間が多かったが、継続的な誘引によって徐々に日中への出没も増え、日中にヤクシカの出没を誘導することができた。

また、捕獲実施日においても誘引地点④では狙い通り、捕獲作業時間内にヤクシカを誘導し捕獲することができた。

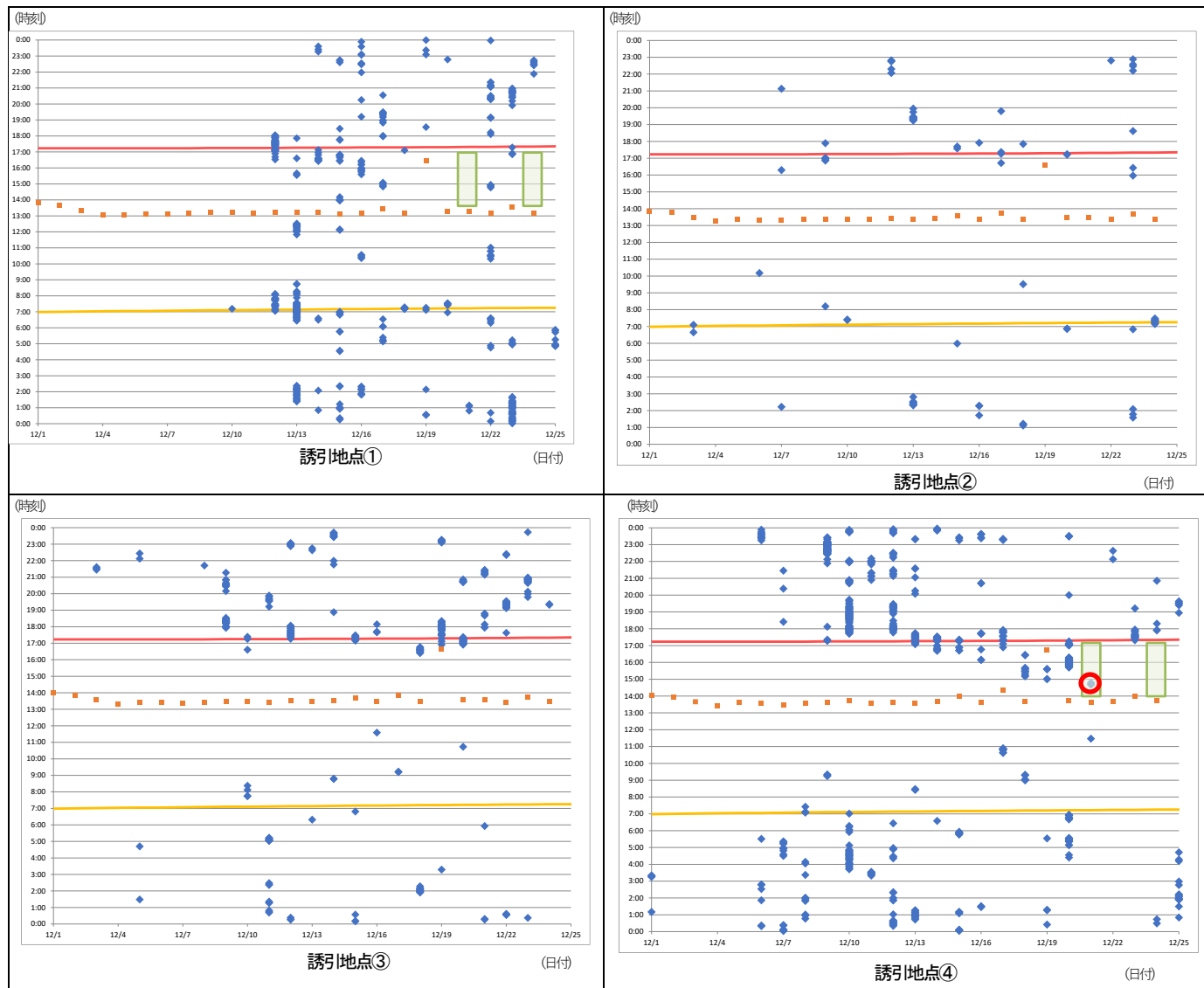


図 4 カンカケ林道におけるヤクシカの出没状況（縦軸は時刻、横軸は日付を示す）

◆個体撮影日時 ○捕獲日時 ■誘引作業時刻 □ 捕獲作業
—時刻日出 - -日没時刻

○センサーカメラによる誘引地点の時間的誘導の効果について

時間的に誘引された場合、ヤクシカは誘引作業時間を覚えて餌を待つため、ヤクシカの出没時刻は誘引作業時刻の前後に収束していくと考えられる。誘引地点①は12月12日以降から誘引時刻の前後に出没するようになり、効果的に時間的誘導できたと考えられる。

誘引地点②～④については、継続的な誘引作業による時間的誘導の効果について確認するため、12月1日から捕獲前日の12月20日までの誘引作業直前および直後の出没時刻を抽出して線形近似を行った。

誘引地点③および④は、近似直線から誘引作業時刻に収束する様子が確認できた。誘引地点②に関しては誘引前後の出没時刻に関する近似直線が日出、日没付近で互いに平行な直線となり、誘引地点へヤクシカを誘導できているが、誘引時刻まで効果的に誘導することはできなかった。

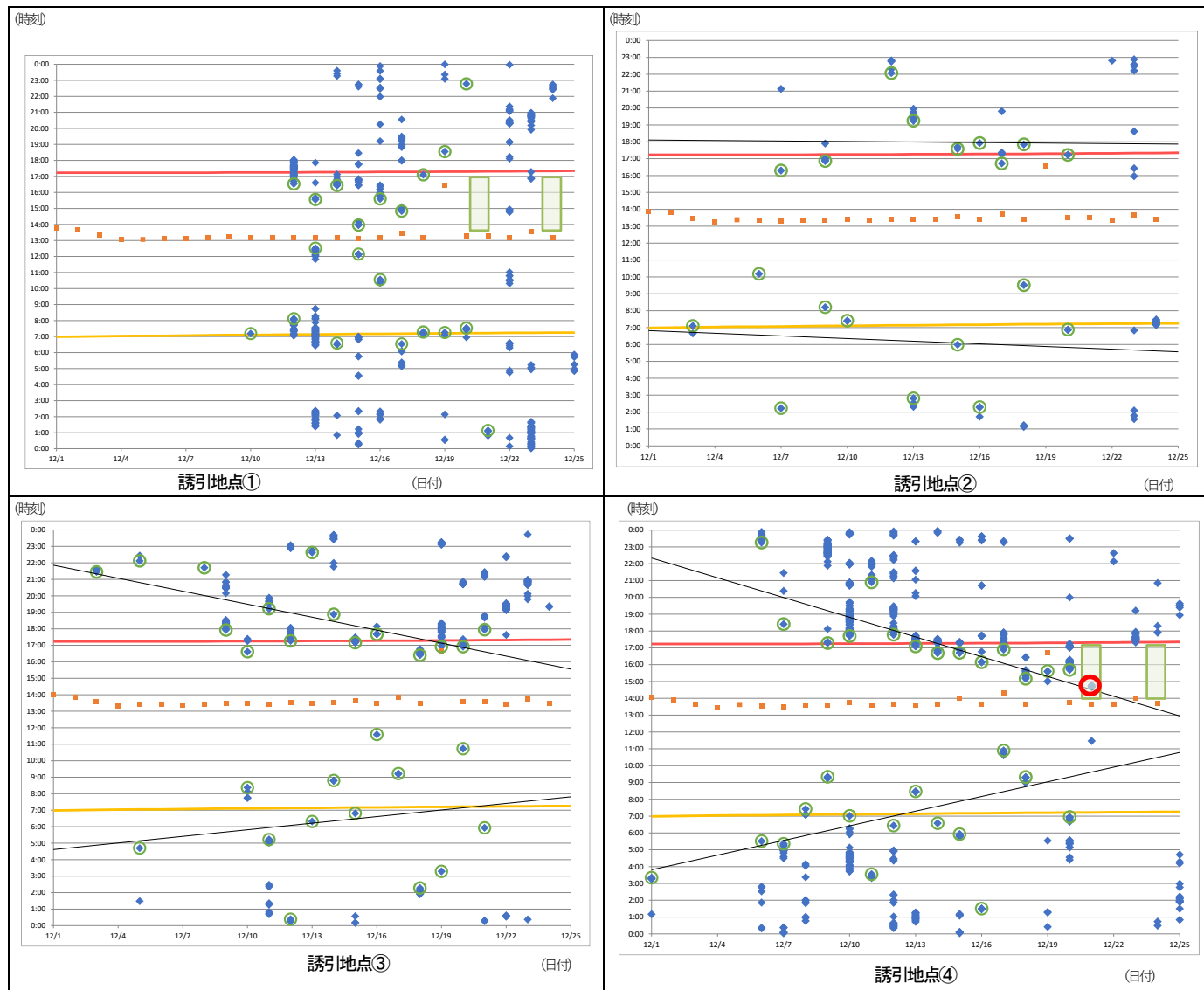


図 5 カンカケ林道におけるヤクシカの時間的誘導効果について（縦軸は時刻、横軸は日付を示す）

○誘引作業前後の直近撮影日時（近似対象） — 近似直線
 ◆ 個体撮影日時 ● 捕獲日時 ● 誘引作業時刻 □ 捕獲作業
 — 時刻日出 — 日没時刻

※近似データは捕獲開始までの12月1日から20日までのものを対象とした

7.まとめと次年度の実施方向性

- ・誘引されたヤクシカは警戒した様子がなかったことから、餌場から 50m以上の距離にテントを設置すれば待ち伏せによる捕獲が可能であることが示された。(昨年度は 30 数 m で実施したところ、誘引時と比較して捕獲日のヤクシカの出没頻度が少なかった)
- ・誘引を継続することで、誘引地点によっては捕獲実施時間内に誘引ができたと考える (時間的誘導を達成)。
- ・今回は誘引餌の補助として「米ぬか」を使用した。特別な効果は感じなかった。なお、タヌキの誘引が目立っており、今後の使用については検討が必要と考える。
- ・カンカケ林道は携帯の電波が入ったため、通信機能の付与した赤外線カメラを活用した。捕獲中も出沒状況が把握できるため、引き続き電波が入る箇所を実施する際は積極的に活用していきたい。また従来の車両を使った誘引狙撃(移動型誘引狙撃)においても有効だと思われる。
- ・今回は本部と捕獲チームとのやり取りに LINE を使用した。電話や無線と違い、声を出さずにやり取りできる反面、入力の手間などを要すなど、今後の活用については検討が必要。
- ・今回実施した「待ち伏せ型誘引狙撃(待機型誘引狙撃)」は、将来的な高標高域や奥岳での捕獲、ピンポイントでの捕獲などを見据えた捕獲手法の構築の一環として実施しており、今回の捕獲も捕獲メンバーの OJT の役割も果たしていると考える。